

比恵遺跡群 (17)

—比恵遺跡第46次調査の概要—

1995

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し、中国大陸・朝鮮半島とはいわば対岸にある福岡市には、先史時代以来の大陸・半島の影響を受けた文化財が数多く残されています。福岡市の市街地の南部に位置する比恵遺跡群も、そうした文化財のひとつで、弥生時代以来古代に至るまで、福岡平野の主要な集落の地位を保った遺跡です。

一方、福岡市は、九州の拠点的な都市として発展を続け、近年は再開発の時期を迎えています。こうした中で、これまで農地として残されていた博多区博多駅南6丁目地内において、賃貸マンションの建設が計画されました。本報告書は、これに関わって実施した比恵遺跡群第26次調査の成果を報告するものです。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理・報告までさまざまなご協力をいただきました地権者である八尋政彦氏および上村建設株式会社をはじめとする多くの方々に、心から謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 尾花 剛

例 言

1. 本書は、住宅建設に先立って福岡市教育委員会が調査を実施した、福岡市博多区博多駅南6丁目13-2に関する発掘調査の成果を報告するものである。
2. 本書の編集、執筆は、大庭康時が行なった。
3. 本書に使用した遺構実測図は大庭および大庭智子が、遺物実測図は大庭が作成した。製図には、井上涼子・上嶋貴代子があつた。なお、遺物実測図の方方は、礎北である。
4. 本書に使用した遺構、遺物写真は、大庭が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
5. 本書に関わる記録類、遺物の整理には、生垣綾子、井上涼子、今井民代、萩尾朱美、古谷宏子、保しみや子、森寿恵があつた。
6. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理、公開される予定である。

目 次

第一章 はじめに	1	2. 遺構	3
1. 調査にいたる経過	1	①. 土坑	3
2. 調査の組織と構成	1	②. 井戸	5
3. 調査地点の立地	1	③. 溝	6
第二章 発掘調査の記録	2	3. 遺物	8
1. 発掘調査の経過と概要	2	第三章 おわりに	13

遺跡調査番号	9240		遺跡略号	HIE-46	
調査地地番	博多区博多駅南6丁目13-2		分布地区番号	東光寺37	
開発面積	932㎡	調査対象面積	356㎡	調査実施面積	388.67㎡
調査期間	1992年10月22日～12月12日				

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経過

1992年5月7日、八尋政彦氏より上村建設株式会社を通じて、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対し、福岡市博多区博多駅南6丁目13-2に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は、弥生時代の環濠集落として著名な比恵遺跡の南辺に位置し、1988年に発掘調査が実施された第18次調査地点の南に隣接していた。そこで、福岡市教育委員会では、1992年5月15日試掘調査を実施、遺構の存在を確認した。

この結果を受けた埋蔵文化財課では、発掘調査が必要であると判断、上村建設との協議にはいった。そして、申請面積932㎡の内、建物部分356㎡について発掘調査を実施することで合意、同年10月22日より調査に着手した。

2. 調査の組織と構成

調査委託	八尋政彦		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	井口雄哉
調査総括	同	埋蔵文化財課課長	折尾 学
	同	第2係長	塩屋勝利
調査庶務	同	第1係	吉田麻由美
調査担当	同	第2係	大庭康時

3. 調査地点の立地

比恵遺跡をめぐる歴史的環境、地理的環境については、紙数の関係から割愛するので、福岡市教育委員会刊行の他の比恵遺跡群の調査報告書を御参照いただくこととし、立地についてのみ述べる。

比恵遺跡群とそのすぐ南に隣接する那珂遺跡群はともに中位段丘上に位置するが、浅い谷が両者を隔てている。本調査地点は、この谷の、比恵遺跡群側の肩部に立地している。したがって、比恵遺跡群の最南端部であると言える。



Fig 1 第46次調査地点位置図

第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の経過と概要

1992年10月22日に調査器材を搬入、同26日より、バックホーによる表土除去を行った。残土搬出が不可能であった為、打って返しによる調査となり、調査区西半分をⅠ区として先ず調査、Ⅰ区終了後これを埋めて東側半分Ⅱ区を調査することとした。

本調査地点は、過去に大規模な削平がなされ、本米の基盤層である烏栖ローム層がなく、その下位の八女粘土層が地山となっていた。八女粘土層の直上には、黒色の包含層が厚さ10～15cm程堆積、その上は更に80cm程の厚さで盛土されていた。よって、重機による表土除去はこの盛土層までとし、包含層は人力で掘削、八女粘土土面において遺構を検出、調査した。

Ⅰ区の調査は、10月22日より11月13日まで、Ⅱ区の調査は11月14日より12月10日までを要し、12月11日器材を撤収、発掘調査を終了した。

遺構検出面となった八女粘土土面は、標高5.45～5.65mでほぼ水平に近いが、北面から南東に緩く傾斜しており、旧地形をとどめたものと思われる。

これを、北に隣接する第18次調査地点と比較すると、第18次調査地点は削平を受けず、標高7.2～7.4mをはかった。したがって、本調査地点での削平は1.75mにも及んでいたと考えられる。

この削平の為、かなりの遺構が破壊されたとみられ、第18次調査において出土した、竪穴住穴址などは、一棟も検出できなかった。検出したのは、土坑・井戸・溝・若干の柱穴状小ピットにとどまる。

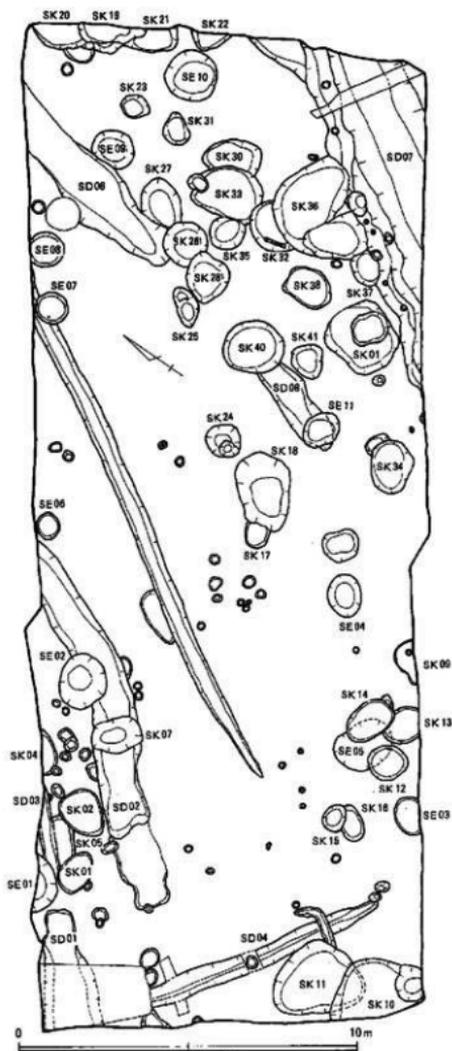


Fig. 2 遺構全体図 (1/150)

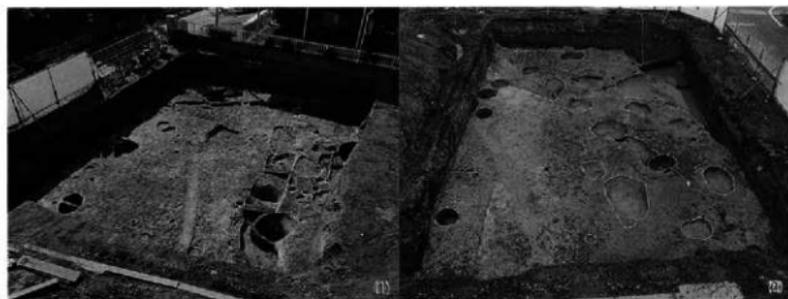


Fig. 3 遺構全景 (1)…北東より (2)…南西より

2. 遺構

① 土坑

後述する井戸・溝・柱穴状の小型ピット以外の掘り込みを土坑とした。したがって、規模、形状ともまちまちであるが、前節で述べた様に本調査地点は過去に大規模な削平をうけており、その本来の深さは失われている。

なお、紙数の関係で、任意の遺構のみFig. 4に実測図を示した。

Tab.1 土坑一覧表

遺構名	時期	平面形態	法量(長径×短径×深)cm	備考	遺構名	時期	平面形態	法量(長径×短径×深)cm	備考
SK-01	古墳	不整楕円形	128×90×24	Fig4	SK-22	古墳	部分	125以上×57以上×30	
-02	古墳	卵形	140×120×3~8	Fig9-1	-23	弥生	楕円形	90×72×12	
-03				欠番(=SK22)	-24	古墳	楕円形	107×80×36	Fig4 Fig9-16
-04	古墳?	部分	135×45以上×9		-25	弥生	楕円形	124×67×17	
-05	弥生後期	楕円形	150以上×52以上×14		-26	古墳	略円形	135×132×24	
-06	古墳	部分	90以上×50以上×8		-27	古墳	楕円形	170以上×120×22	Fig9-17
-07	古墳	長方形	140×93×63	Fig4	-28	古墳	卵形	141×123×24	Fig4 Fig9-18
-08	古墳	部分	190以上×60以上×5		-29	弥生後期		不明	SK-19と重複
-09	古墳	部分	135×60以上×7		-30	古墳	楕円形	180×90以上×18	
-10	古墳	部分	300以上×190以上×17	Fig9-2-3	-31	古墳	不整楕円形	98×79×7	
-11	古墳	不整楕円形	285×221×22		-32	古墳	部分	165×83以上×19	
-12	古墳	楕円形	123×93×10.5	Fig4 Fig9-4	-33	古墳	不整楕円形	218×150×24	
-13	弥生後期	部分	81以上×103×15	Fig4	-34	古墳	楕円形	158×128×35	
-14	弥生後期	不整楕円形	163×144×26	Fig4 Fig9-5-9	-35	古墳	楕円形	113×98×20	
-15	古墳	楕円形	83×68×14		-36	古墳	部分	310×263以上×34	
-16	古墳	楕円形	109×72×11		-37	弥生中期?	部分	105以上×82以上×34	
-17	古墳	楕円形	75以上×75×4		-38	弥生後期?	楕円形	147×113×27	Fig9-19
-18	古墳	不整楕円形	238×154×40	Fig4 Fig9-10	-39	古墳	楕円形	113×90×18	
-19	古墳	部分	202×53以上×23	Fig9-11	-40	古墳	楕円形	184×154×31	Fig9-20
-20	古墳	部分	150以上×75以上×39	Fig9-12 ~14	-41	古墳	不整楕円形	102×102×30	Fig41 Fig9-21
-21	古墳	部分	150以上×80以上×9	Fig9-15					

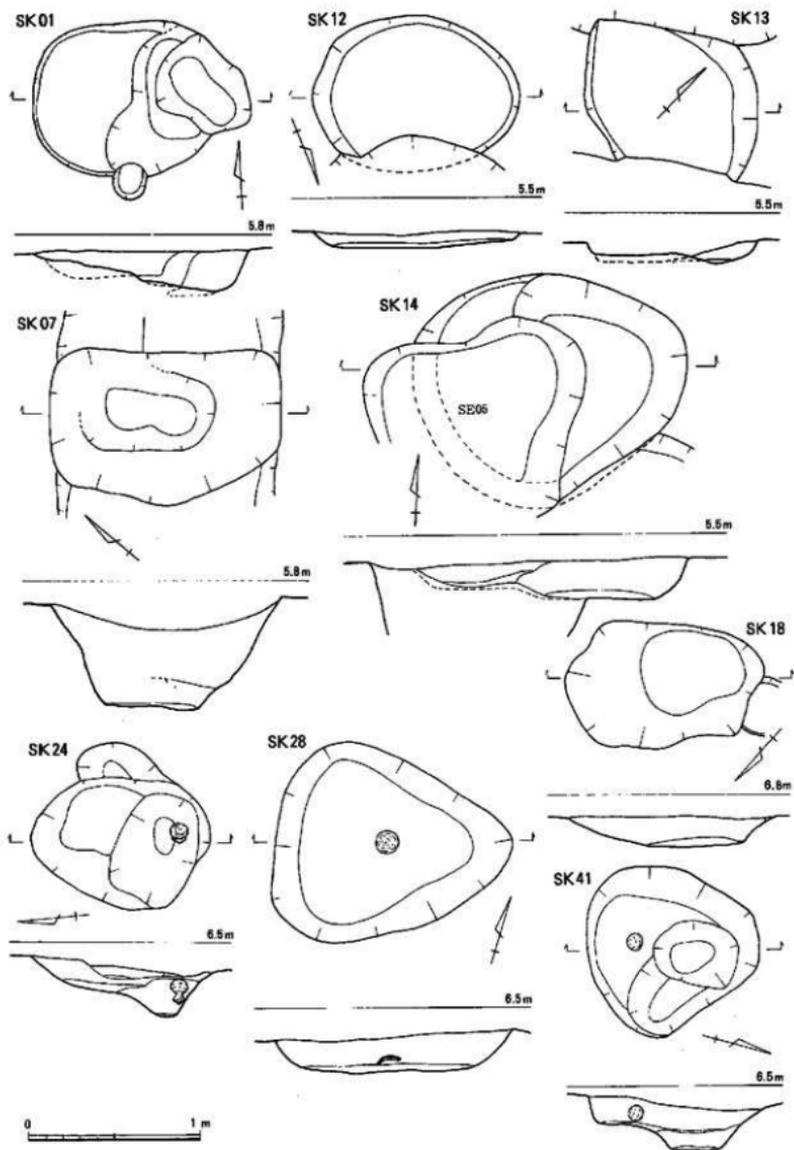


Fig. 4 土坑実測図 (1/30 SK18のみ 1/60)

② 井戸

遺構の壁が垂直もしくはそれに近い急傾斜で立ち上る、平面円形または楕円形の土坑を、井戸とした。したがって、一部には前述した土坑との区別があいまいなものもある。2号井戸は、一見すると土坑と井戸が重複している様だが、埋土の観察及び上層と下層に分けて取り上げた出土遺物の上からは差異は認められず、単一の井戸として扱っている。

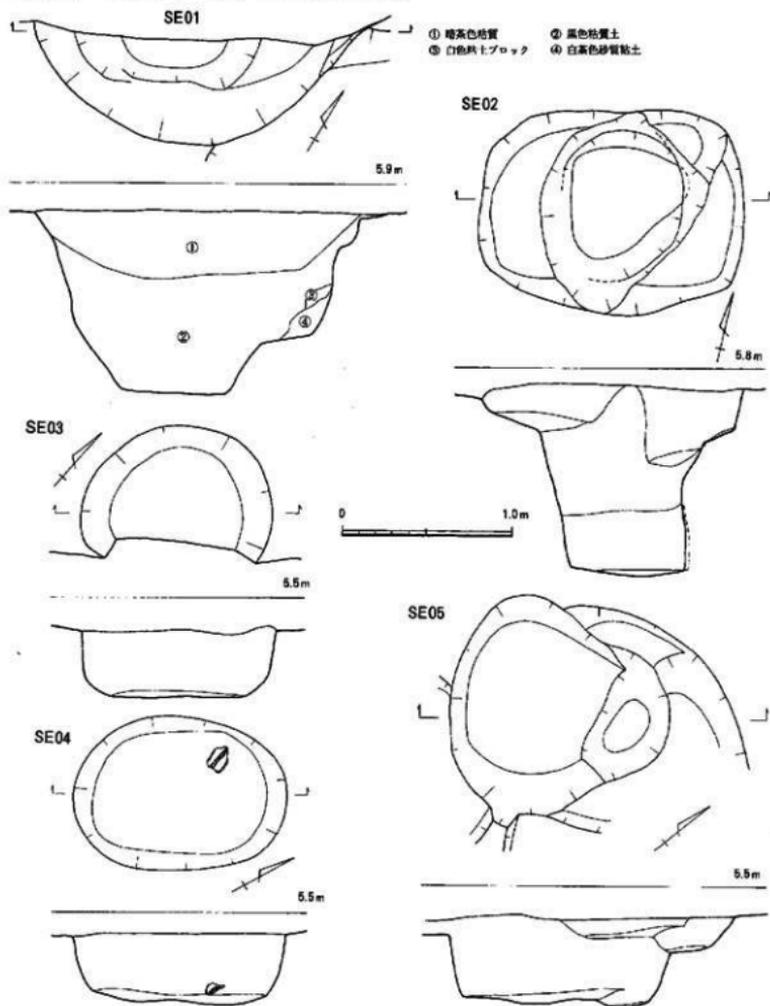


Fig. 5 井戸実測図1 (1/30)

Tab. 2 井戸一覽表

遺構名	時期	平面形態	法量(長径×短径×深)cm	備考	遺構名	時期	平面形態	法量(長径×短径×深)cm	備考
SE-01	古墳	円形?(部分)	195以上×65以上×111	Fig5	SE-07	古墳	略円形	93×88×70	Fig4 Fig11-31-33
-02	古墳	上部 長方形 下部 円形	136×123×30 109×87×114(出土部のみ)	Fig5 Fig11-22-26	-08	古墳	略円形	114×102×75	Fig6
-03	古墳	円形?	115×85以上×40	Fig5	-09	古墳	略円形	114×112×39	Fig4 Fig11-34
-04	弥生後期	楕円形	129×93×42	Fig5 Fig11-27	-10	古墳	略円形	166×140×48	Fig4 Fig11-35
-05	弥生後期	不整楕円形	135×132×54	Fig5 Fig11-28-30	-11	古墳	楕円形	120×90×50	Fig6
-06	古墳	円形	78×76×110	Fig6					

③ 溝

溝状遺構は全体で9条検出したが、9号溝は近世以後の耕地に伴うものである。また4号溝は、八女粘土中に封入された木材を誤認したもので人為的な遺構ではなく、欠番とした。

Tab. 3 溝一覽表

遺構名	時期	方向	計測値(幅×深)cm	備考	遺構名	時期	方向	計測値(幅×深)cm	備考
SD-01	弥生中期?	N-45°-E	80~172-6~30		SD-06	弥生中期?	N-11°-E	180-11~21.5	
-02	古墳	N-34°-30'-E 溝と、溝状	120-5~19	Fig13-36~46	-07	弥生後期	N-29°-30'-E	340以上-145	Fig12・14
-03	古墳	N-42°-30'-E	45-11.5		-08	弥生後期	N-17°-30'-E	82~97-13~27	Fig13-47~50
-04				欠番	-09	近世以降	N-29°-30'-E	41-8	
-05	?	N-32°-30'-E	30-14						

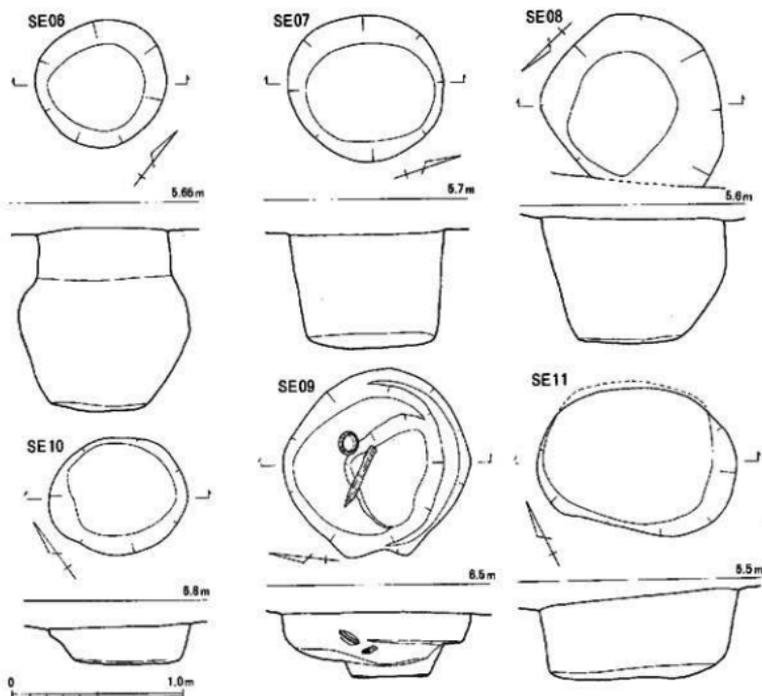


Fig. 6 井戸実測図2 (1/30 SE10のみ1/60)

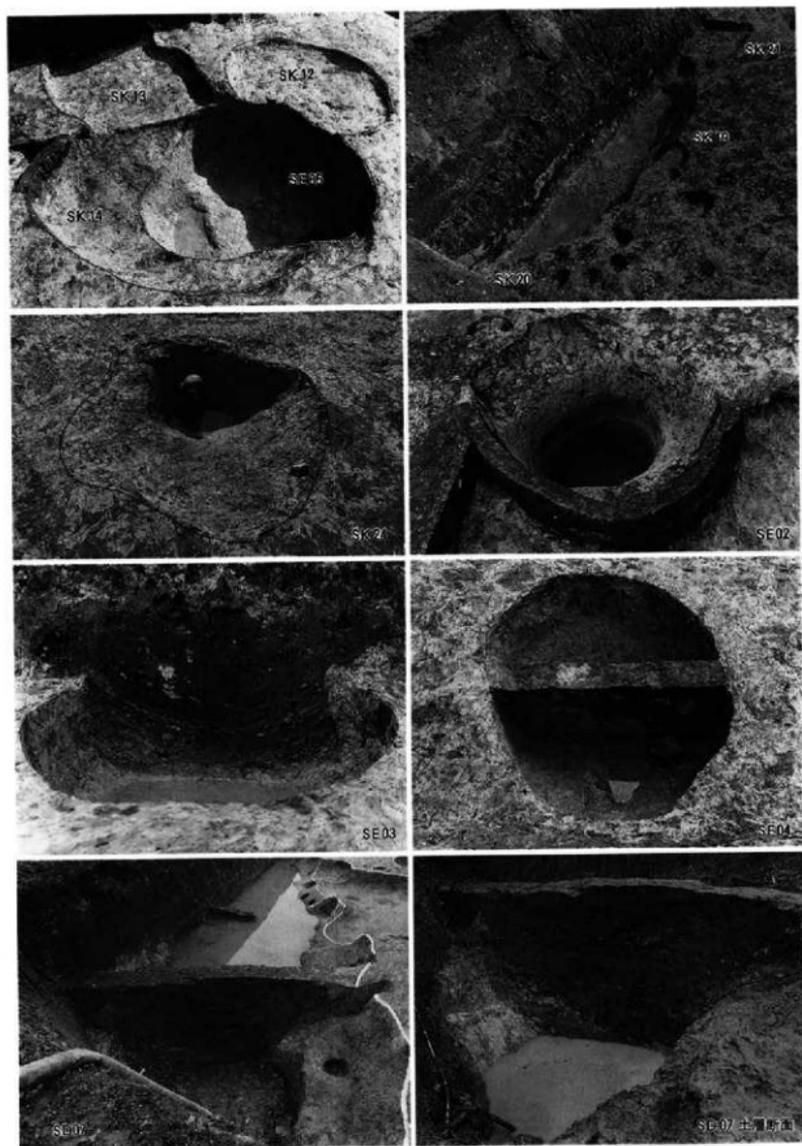


Fig. 7 検出遺構写真

3. 遺物

紙数の関係から、すべての遺構について出土遺物を報告することはできないので、比較的遺存部位が大きい遺物を中心に紹介する。なお、出土遺構は、それぞれの図中に示した。

1・10～14・16～18・21～24・31～39は須恵器、2・3・15・20・25・26・40～46は土師器、4～9・19・27・47～61・Fig.12—2は弥生式土器である。以下、特徴的なものについて簡略に説明を加える。

2は、器台である。口縁内面には、指頭押圧による爪痕が縦に刻まれ、押し引き状に横に並ぶ。4・5・19・30は、甕の口縁である。口唇の下端を下方に突出させる。6は、口縁を丸く玉縁状に作る。全体に器厚が均一で、整形も整っている。7は鉢である。灰白色の胎土で、一見すると地の土器ではない様である。肩部に型押し様の波状文が施される。8・9の口唇部には、薄い板状工具による刻み目がめぐる。20は、手捏ねの盃形土器である。40号土坑からは、同様の手捏ねの盃形土器がもう一点出土している。25は、底部を欠くが、脚付坏である。内外面とも磨滅し、調整痕は残らない。27は、大型の甕である。頸部に一条の貼付突帯を持つ。突帯の上には、板状工具の刺突による×文が施される。31には、大きくへら記号が刻まれている。36には、貝殻腹縁による刺突文が並ぶ。41・42は、いわゆる椀須恵土師器の坏である。磨滅のため調整ははっきりしないが、41の内面はナデ調整されている。44・45は、底部を欠くが、脚付碗であろう。50は高坏である。白肌色の胎で、比較的焼き締まっている。内外面とも暗文状のヘラミガキを加える。51は、丹塗磨研の短頸壺である。口縁内面から外面を丹塗りする。外面には密に横位のヘラミガキを施す。短く折り返した頸部の相対する2ヶ所に、一対の穿孔がみられる。52も丹塗りの壺である。内面は横位のナデ調整だが、頸部内面のみ工具を用いている様で、工具が当たった痕跡を残す。55～57は器台である。内面はナデ調整、外面は縦方向に刷毛目調整する。なお、内面にはしほり痕が認められる。58～61は甕である。内面には厚く煤が付着する。Fig.12—2は、高杯である。円形の透しがあけられる。なお、内面をみると、この透しより若干上位に、一度穿孔した後、粘土をつめてふさいだ痕跡があり、穿孔をやり直したことがわかる。Fig.12—3は、花崗岩の石鐮である。四方に凹みがつけられている。

Fig.15に示したのは遺構検出面を覆っていた包含層からの出土遺物である。包含層からは、土器類を中心に多量の出土があったが、特殊なものを除いて、ほとんどを割愛した。

62～64は、滑石製の白玉である。包含層からは、更に3点の滑石製白玉が出土している。65は、ガラス小玉である。表面が風化しており、透明感はないが、深緑色を呈する。66～69は、黒曜石製の石

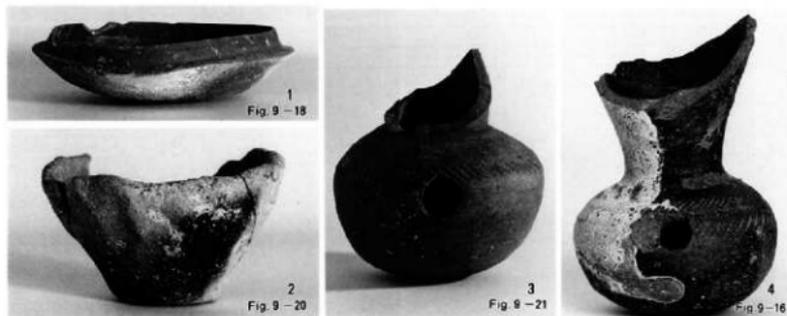


Fig.8 出土遺物写真1

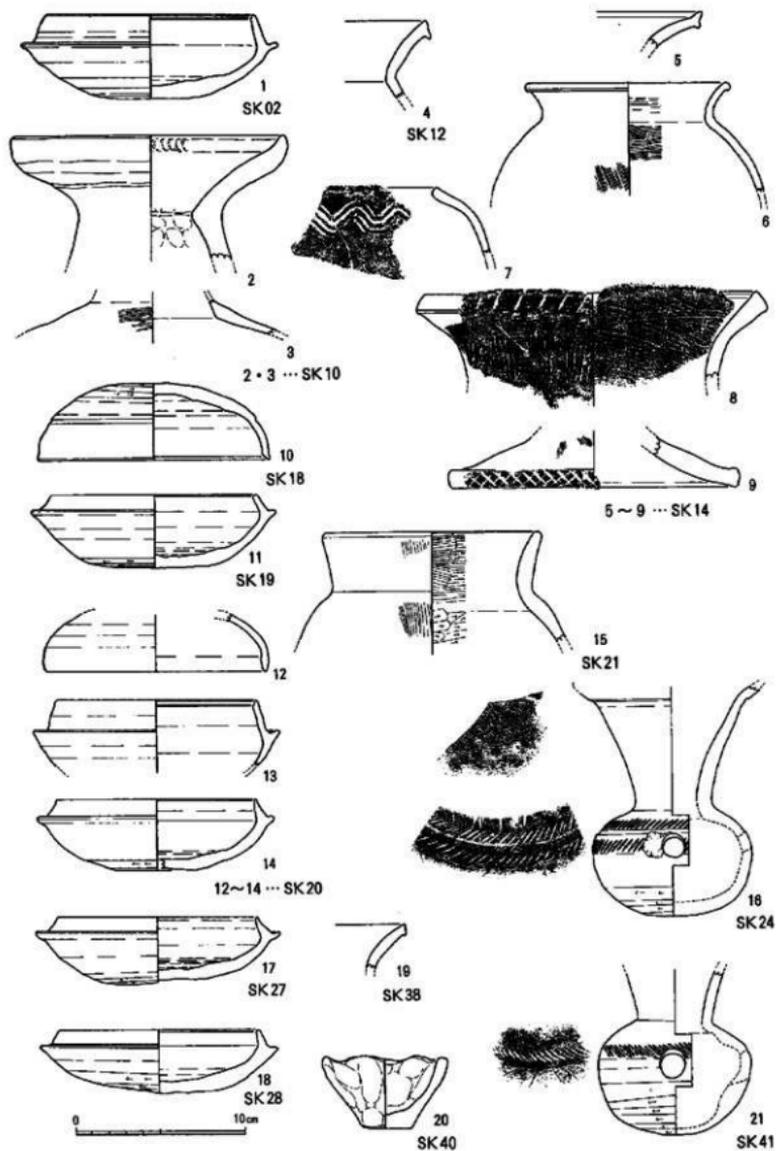


Fig. 9 出土遺物実測図1 (1/3)

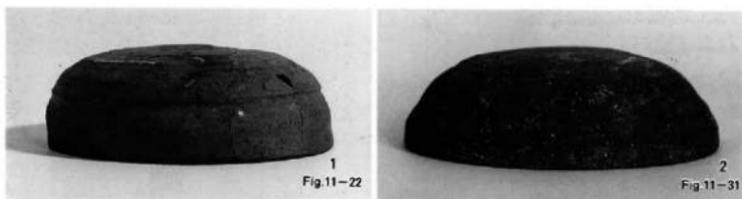


Fig.10 出土遺物写真2

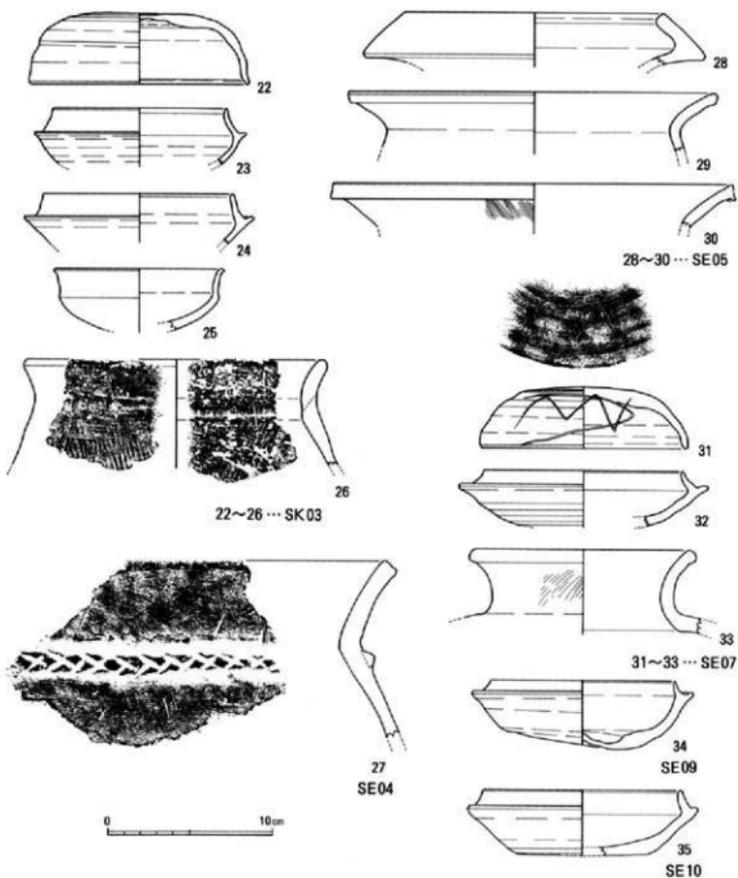
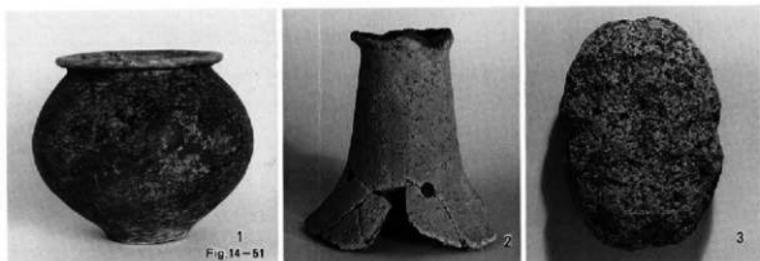


Fig.11 出土遺物実測図2 (1/3)



1
Fig.14-51

Fig.12 出土遺物写真3 (SD07)

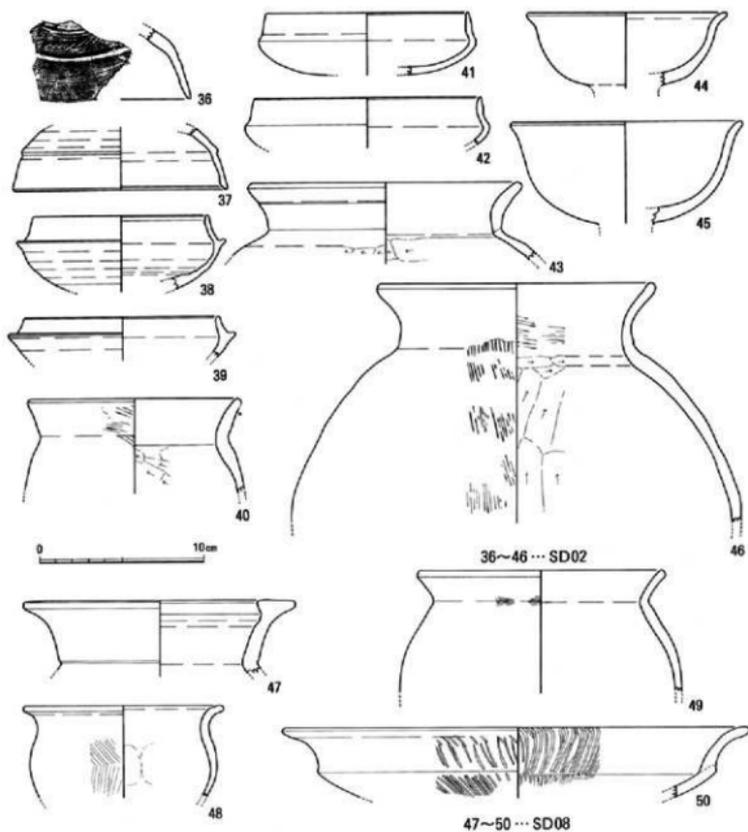


Fig.13 出土遺物実測図3 (1/3)

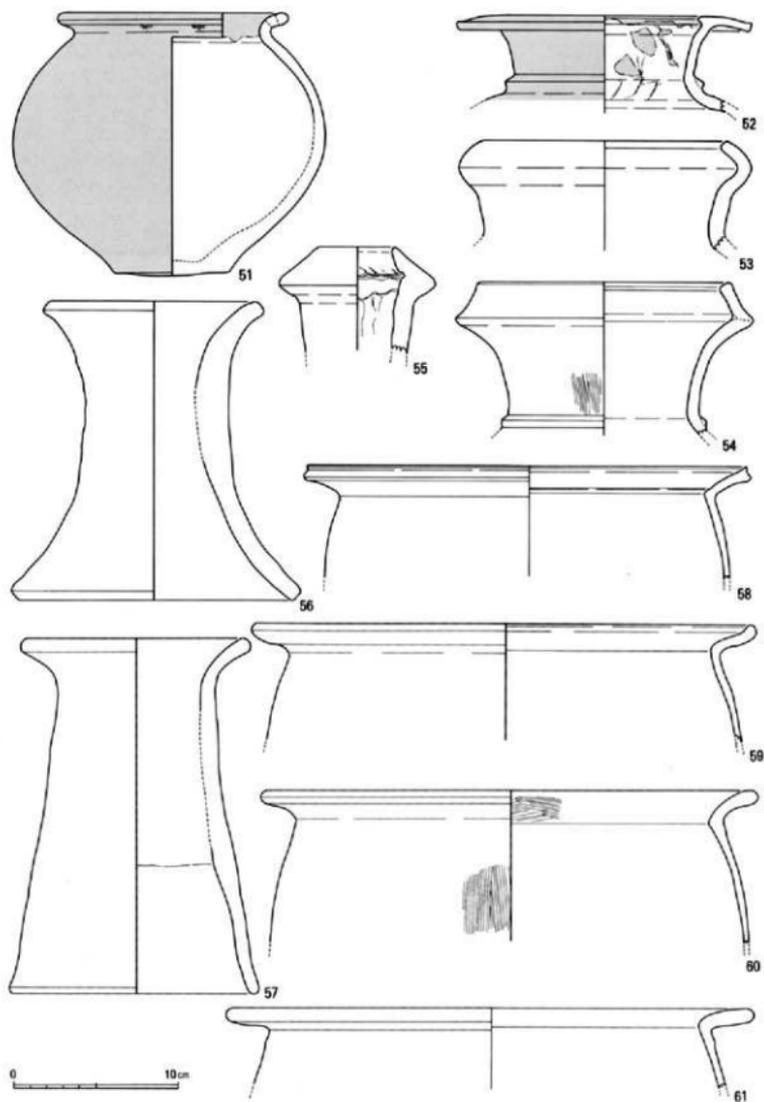


Fig.14 出土遺物実測図4 (1/3)

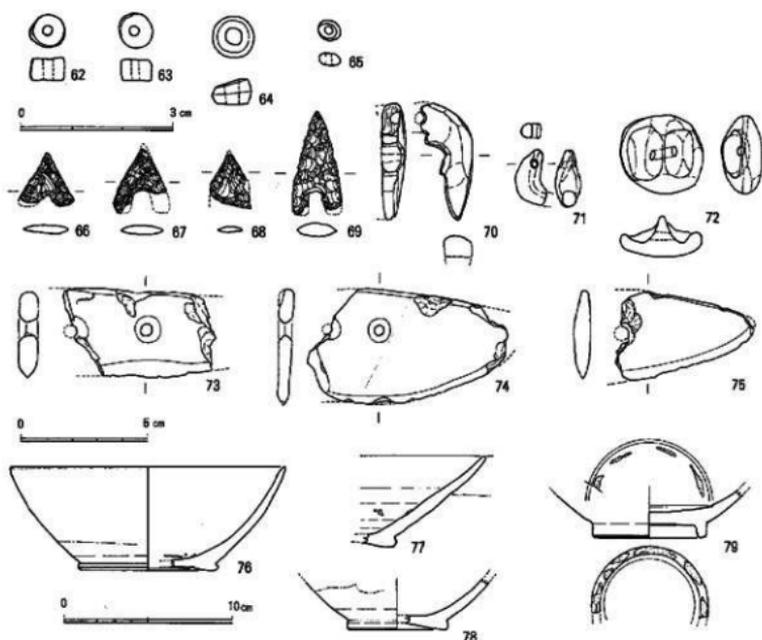


Fig.15出土遺物実測図5 (62~65…1/1、66~75…1/2、76~79…1/3)

鐵である。66は大分県姫島産の黒曜石、他は佐賀県腰岳産である。69は頁岩製の石鐵である。70は、滑石製のおそらく勾玉であろう。71は土製勾玉で、尾部の先端を欠く。72は、土製模造鏡である。73~75は、石廬丁である。いずれも凝灰岩製である。76~79は、越州窯系青磁碗である。76~78は、体部下位および外底部を露胎とする。79は前面施釉で、高台端部に重ね焼きの日痕が並ぶ。

第3章 おわりに

以上、非常に簡単に比恵遺跡群第46次調査の成果を紹介してきた。この概報の末尾にあたり、本文中で詳述できなかった7号溝について、若干の補足説明を加えたい。

7号溝は、調査区の東隅で検出した濠状の溝で、南西から北東に、直線的に延びる。断面はU字形で、途中に段が付き二段掘り状となる。溝の東岸は検出できなかったが、中斷までは確認できており、それからみて、幅は約4~4.5m、深さ約1.4mをはかる。本調査地点では、大規模な削平が行われているので、それを勘案すれば、本来は幅5~6m、深さ2.5mにも達しよう。また、西側中段には、径10~20cmほどの柱穴が点々と並んでおり、ここに杭を立てていたものと思われる。溝の下部では容易に湧水するから、杭の上部構造として柳を考えれば、水濠とその内側の塀が想定できる。弥生時代後期、比恵の集落の南辺を画した、防禦的色彩の強い濠、というのが、7号溝の姿態であろうか。

比恵遺跡群 (17)

比恵遺跡第46次調査の概要

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第403集

1995年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 俣松古堂印刷
